

戦争と私

大牟田市 森井 ツギノ

戦時中当時、戦災で家が焼けるまで私は大牟田市曙町83番地に住んでいました。

昭和17年10月22日、次男の昭嘉を出産し、11月8日に夫に召集令状が来ました。早速会社（三井三池鉱業所宮浦坑）に連絡、11月15日福岡連隊へ入隊とのこと、期間は一週間で夫は養子でしたので、熊本県八代郡文政村宝出の実父母の墓参り、親戚への挨拶と目まぐるしく走り回り、家でくつろぐ時間も無い程に用件を済ませねばならず、次男とも顔を合わせ、頬ずりするのめやっと、「大きくなれよ」と言っていたのが目に残っています。

万歳の声に送られて家を出発した後、夫に渡す物があり、私一人で大牟田駅まで持って行きました。駅でお見送りの方々に「元気でお国のために戦って来ます。残された父母妻子をよろしく願います」と挨拶しているところでした。私を見て驚いて駆け寄り、「無理せず元気で二人の子どもを頼む」と言った言葉が最後で、二度と夫とは語り合うことはありませんでした。汽車の窓から手を振る夫に、長男の勝己が「父ちゃん、僕も乗って行く」とホームを走り、駄々こねて困らせたものです。数え年で夫が27歳、私が20歳、長男勝己が4歳、次男昭嘉が生後25日目でした。

一週間程して連隊より面会の通知がありましたけれど、私は産褥で行かれませんでした。朝早く夫の大好物のポタ餅を作り、ハジキ豆等を持って父母と子供の三人が行き、面会所で夫が、隊の人で家族の方が来れない人がいるからとポタ餅をソーッと胸に入れて持って行ったと帰って話してくれました。やさしい夫の心情が嬉しかった。

出征後は、二人の子供を母親に託し、近所の上田印刷所に勤めて昼休みに乳をふくませに帰ってくると、嬉しそうに全身を動かし手足をバタバタ、鼻をイゴイゴさせ喜んでいた姿が目に染みえています。二人共元気に育ち皆様から可愛がられていましたが、翌18年5月22日、病院にはかかっていたけれど急性肺炎で一晩で急変、生まれた日と同じ22日に亡くなりました。満8ヶ月の短い命でした。今は良い薬もありますが、当時はどうしようも無く悲嘆に暮れましたが、残された長男と一家4人細々と暮らしておりました。

そろそろ道路疎開の話も出始めた頃、上田印刷も田舎の方に行かれ、私は別の原印刷に勤めることになりました。各会社に印刷物納品が多い時は3人程でリヤカーに積み、暑い日寒い日も苦勞とは思わず働いたものです。戦地での夫の事を思えば何のこれしきかすり傷と、今の若い方達に笑われるような心境でした。

家族の写真も送りました。3月頃昭嘉が元気な頃の写真でした。その後、戦地から逆に慰問袋をいただいたと万年筆等いろいろ送ってきた後、何の便りもなかった。久しぶりに南海派遣猛朝2054部隊水井隊とあるのみで、この後しばらく便りは出せぬとこれが最後の便りでした。

そろそろ戦時一色、食糧はもとより衣類は切符制「ほしがりません勝つまでは。贅沢は敵だ」の合言葉をモットーに、一億火の玉と銃後の守りに一生懸命働いたものです。

戦況いよいよ悪化し、燈下管制の薄暗い下で食事にも慣れた頃、毎日のようにB29が高度5000m程の上空を『キーン』と金属製の音を立て上空より脅やかすようになった。

防空頭巾にモンペ姿で毎夕竹ヤリ、バケツリレー、梯子登り、トビロ消火と訓練に励んだ。

昭和20年6月17日、大牟田に第1回の空襲があり、警戒警報、空襲警報、敵機来襲と真っ赤なソーセージのような焼夷弾が降る雨のごとく投下され、隣家の田中様宅に落ち、無我夢中でどうにか父と共に消し止めました。助けを呼ぶにも皆それぞれ必死に家を守っていたのです。

母と長男は、東本願寺の境内にある町内の防空壕に避難させてました。それに油脂焼夷弾は幽霊の火のように青光を発し、ぴよんぴよんと道路をはね回り、水では駄目で土や棒切れ、板等でたたいて回り、恐いとは思わなかった。消さねばと思う気持ちが一杯でした。

古賀百貨店が危ないので応援とのこと、走り行けば窓から吹上げる火の手がバリバリと音を立てて全店火の海、まるで映画のシーンでも見るようで手がつけられなかった。

後で雨が降り出し、火の手も何とか収まり、翌朝荒尾の友人島田富子さんが来られ、その惨状に驚いてすぐ家に帰られ、昼におにぎりを持って来て下さった。当時は脱脂大豆、コウリヤンの時代、白米の『おにぎり』は非常に嬉しく友の情けが身にしみ有難たかった。

さあ衣類等早く疎開させねばと、米屋さんからリヤカーを借り、柳行李に詰め込み、日用品少々、父と二人で柳川の伯母の家に預けに行った。途中警報にあい、笹や葦等上に載せ、土手にうずくまり辛い思いをしたものです。

2回目の大牟田空襲は7月26日でした。毎日のように来る敵機に、今日はどうだろうと近所の人達と話して別れた。やはり警報が発令、早々に母と子供を防空壕に避難させ、四つ角の宮地床屋さんのラジオの放送を聞いていたら、天草上空に敵機という報に驚き、家まで飛ぶようにして帰り、父に言う間もなく空襲警報のサイレンが鳴った。時既に爆撃機は頭上来て照明弾を投下、昼のように明るくなり、降る雨のごとく焼夷弾を投下、警防団の人が「消火。消火」と叫び回られたが、人影は無く水道の蛇口を捻っても水は出なかった。

当時水道は4、5軒共同水道だった。無意識にモンペのポケットに水道の鍵を入れたのが、今は大切な記念品として大事に保管しています。

水は出ず、あちこちで火の手は上り、『ズドーン、シュウー。メリメリ、ガサーッ、パーン。バリバリ、ボンボン』と飛び散る轟音、まるで戦場、地獄絵図。その度に「父さん。父さん」と飛び回ってました。もはや辺り一面火の海、父が「もう駄目だ行こう。布団、布団」と言った時、先隣りの稗田幸江さんの声がした。驚いて三人で四軒巾の道路を頭から布団をかぶり四つ角まで来た途端、急にドサッと重い物がのしかかり動けなくなった。父が、「早くそのまま抜け出せよ」と叫んだ。抜け出し振り向けば、何と真っ赤に燃えさかる電柱が布団に倒れていた。驚く暇もなく一目散に防空壕へと走った。壕の入口にいた隣組の人が「来た。来た」（私

のことを皆チイシャンと呼んでいた)、「チイシャン達が来たバアチャン安心せよ」と叫んだ。早く早くと壕の中へ入った途端にグショッと腰まで水、昨夜ポンプで排水していなかったのが水が溜まっていた。お陰様で熱風にも助かった、何が幸いするか分からない。執拗に上空を旋回する爆撃機、低空でグアーンと来る度に水の中に顔を突っ込んだ。

爆音が遠のき腕をつねった。痛いああ生きていたと思わずほーっとし、壕の中の人達と声をかけ合い無事を喜びあった。

敵機が去り、外に出ればまだドンドン燃えていた。私の家はあの辺りと目頭がジーンと熱くなった。皆さんの顔は泥水でクジャクジャでも笑えない、家族四人皆無事だった事が何よりも嬉しかった。

さてこの後どうしようと思っていた時、町内で夫の友人、大洋舎クリーニング店主の田中様が、「上内に親戚があるからひとまず行きましょう」と地獄に仏の申し出に感謝し、上内村へと行きました。

重い足を引きずるように皆助け合い、白銀川を上流へ上流へと東をさして上内村に行きお世話になりました。

その夜は久し振りの安住の地でグッスリ寝させていただきました。紙面の都合で失礼致します。

南海の孤島に散りて半世紀

いま逢い得なば息子とぞ思う